

収蔵資料
調査報告書

19

宇治茶の民具

2017.3

宇治市歴史資料館

収蔵資料 調査報告書

19

宇治茶の民具

歴史資料館では、昭和59年(1984)の開館以来、資料の収集に努めて参りました。市役所内の各部署とも連携をはかり、本市における歴史資料保存施設としての役割も果たしています。

今回は、宇治茶の民具を紹介します。宇治の知名度が、全国的に高いのはまさに茶のおかげとして良いでしょう。本市は、一般的な「市の木 もみじ(イロハモミジ)」とは別に茶を「市の宝木」と定めています。収蔵資料の中から、そんな茶の製造に関する民具をまとめました。

平成29年 3月

宇治市歴史資料館

目次

1	宇治茶の民具の概要	2
2	資料目録 宇治茶の民具	24
3	空中写真に見る茶園	39
4	民具を受入れ始めたころ	
	— 「たまり場」としての資料館 —	48

■ 1 宇治茶の民具の概要

■資料収集の経緯

やはり宇治、と言えば茶であろう。開館翌年の昭和60年(1985)に開催した第1回特別展のタイトルも「宇治茶一名所図から製茶図へ」であった。その後、特別展で宇治茶にかかわる資料を取り上げたのは、第9回「大名と茶師—三入宛書状を中心に—」(平成5・1993)、第31回「宇治茶—トップブランドの成立と展開—」(同27・2015)とさほど多くはない。一方、企画展では初夏、新茶の季節に茶業関係の展示を実施することがほぼ恒例となっている。その際に展示の主役を務めてきたのが、今回紹介する民具資料群である。その収集の経緯、なかでも開館当初の状況については、48ページからの「4 民具を受入れ始めたころ—「たまり場」としての資料館—」に詳しい。

本市の都市化は昭和30年代末から始まり、昭和40年代の十年間で約6万9千人(昭和40・1965年)から約13万3千人(同50・1975年)へと人口がほぼ倍増する。その後の10年間ごとの人口増加は、約3万2千人(1985年まで)、約1万9千人(1995年まで)、5千人(2005年まで)である。いかにこの時期の人口増加が急激なものであったかがうかがえる。当然ながら、住宅が建つ前、その土地の多くは田地や茶園であった。本市の都市的な発展が、茶園の減少をもたらしたのである。

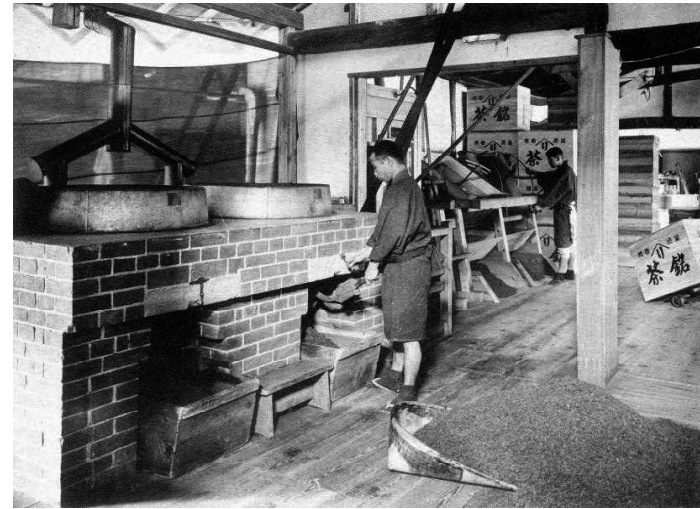
ただ、当館の開館後しばらくのあいだ、1980年代から90年代にかけての時期は、昭和戦後期に本市の農業の担い手であった人びとがまだまだ現役として活躍し、自宅の小屋にかつて使っていた農具を大事に残されていた。そういう意味でも、当館がこれらの資料を収集したのは、いわば最後のチャンスとあって良い時期であったかも知れない。

■宇治茶の民具 画像索引

5ページ以降に、今回報告する宇治茶の民具のうち代表的なもの、それが実際に使われていた様子がうかがえる写真をあわせて紹介する。目録の資料番号も併載している。画像による民具索引として利用していただきたい。写真は、大正4年(1915)に刊行された『京都府久世郡写真帖』を中心に用い、一部を同13年刊『京都茶業総覧写真帖』、同時代と推定される絵はがきで補った。なお、平成27年度特別展図録『宇治茶—トップブランドの成立と展開—』では、明治中期に製作されたと見られる京都府茶業会議所蔵「製茶図」全場面と民具の写真をカラーで掲載している。あわせて参照されたい。

『京都府久世郡写真帖』には、5ページ以降に掲載した写真のほか、乾燥、切断、撰別の工程も掲載される。しかしながら、これらは当時すでに機械が導入された状況をしめすものであるため、民具の使用例として参考にならないことから、掲載はしていない。こうした製茶作業の一部が機械化された状況を、半分機械化の意で「半機」と呼ぶ。すべて機械化すると「全機」である。高級茶の産地である宇治では、繊細な作業が求められた。そうした作業を機械がこなせるようになるまで、導入が見送られたのである。そのため、宇治では「半機」の期間が他の産地より長く、明治末期から昭和初期まで約30年におよんだという。

参考まで、「半機」時代の写真と写真帖に掲載された解説文を掲載する。引用にあたっては一部句読点や明らかな誤字等を調整した。画面には、機械の横や上下など、作業場のあちこちにボテやミ(箕)にトオシ(篩)、茶櫃といった次ページ以降に登場する民具も散見される。



『京都府久世郡写真帖』 第八十七 製茶乾燥機及冷釜

本機は鉄製にして煎茶製に限り用ゆるものにして、釜の深さ二尺直径四尺釜の底に径八寸の穴をあけありて、其の穴より茶を掃出す、廻転のときは其の穴を「ハンドル」にて塞ぎ、直ぐ其釜の下には木炭の火を適度に入れ、温度を加減す、湿りたる茶を一釜に三貫目を入れる。乾燥時間は普通八分乃至十分間を要すれども、特別の湿茶は十五分間を要することあり。釜の底には茶を攪乱する半円形の長サ尺四寸の丸き真鍮製の大三本小三本の心棒あり、大の長サ五寸なり。

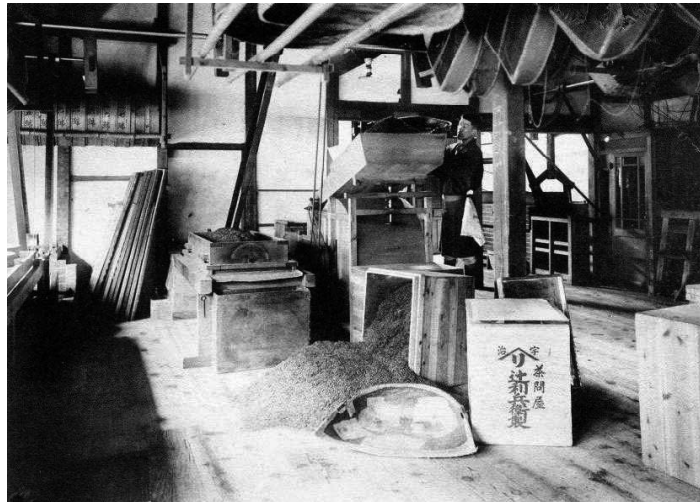
煎茶の乾燥機にて乾燥せし後、直に冷釜に投入し、乾燥により生じたる温熱を迅速に散ぜしむ、若し五分間以上を経過するも尚ほ冷却せざる時は、其香気及色沢を損ずるに至る、即ち一回五分間にして茶量約三貫目を冷却することを得へし。



『京都府久世郡写真帖』 第八十八 製茶切断器及平行篩

茶の太きものを細かくし、長きものを短かくするものにして、是も又篩六号より十号迄用ゆ。六号は一寸に六つ目のあるものを云ひ、此篩の寸法は巾一尺八寸、長サ四尺の構造、一時間八十貫を切断す。

平行篩は玉露及煎茶、薄茶の太き細かきを区分する器械なり。茶によりて種々なる篩を用ゆ。其形円くして何れも直径尺八寸篩は五号より十六号迄用ゆ。五号は一寸に対し五ツ目のあるものを云ふ。十六号は一寸に十六目あるものを云ふ。篩一個に八百目入篩の数六個備付あり、大抵五分間にて分析す。



『京都府久世郡写真帖』 第八十九 製茶唐箕

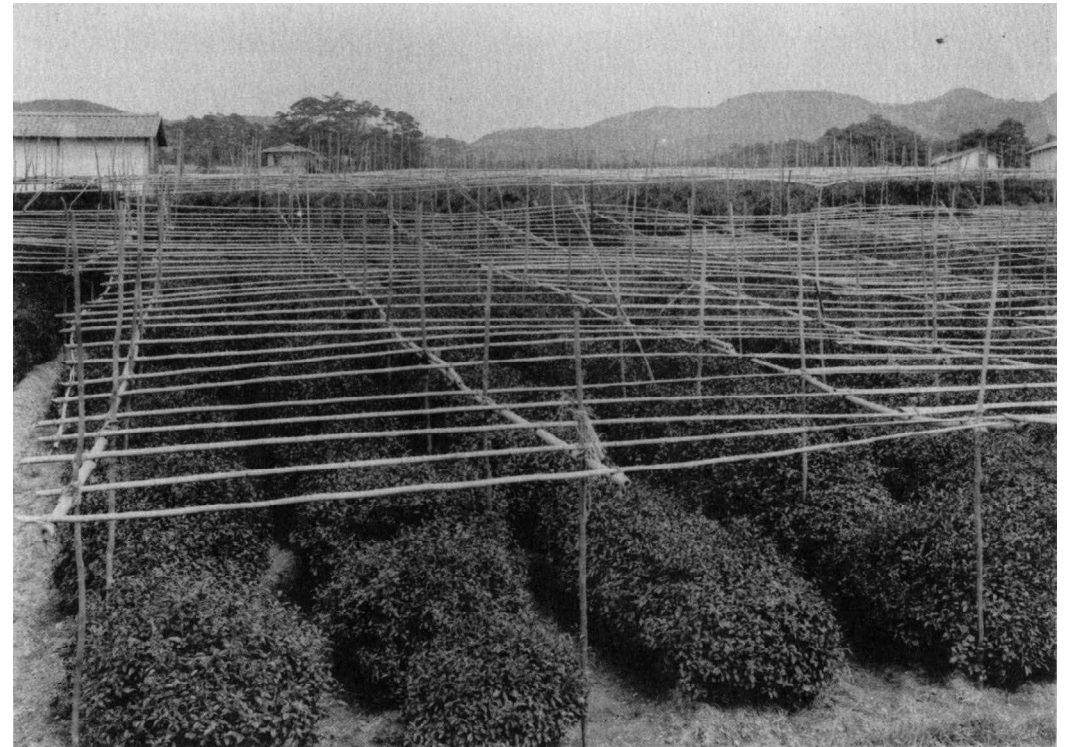
木造にして漏斗に茶を入れ、電力を以て其漏斗を震動せしむるときは、漏斗中の茶は扇風の為めに三種に分れて受け箱の中に落つ。其茶は精撰、中粉、細粉の三種に分別せられて出つるなり。



『京都府久世郡写真帖』 第九十一 挽茶器械

挽茶器械は宇治石にて臼を造り、其の直径尺二寸にして其上端に半円形の引手を取り付け、之に「立シャフト」を付け、電力により左に運転すること1分間五十七八回にして、一時間に九十目乃至百目の抹茶を得。

茶園と茶摘みの道具



『京都茶業写真総覧』 第四十一図 覆架け 其一

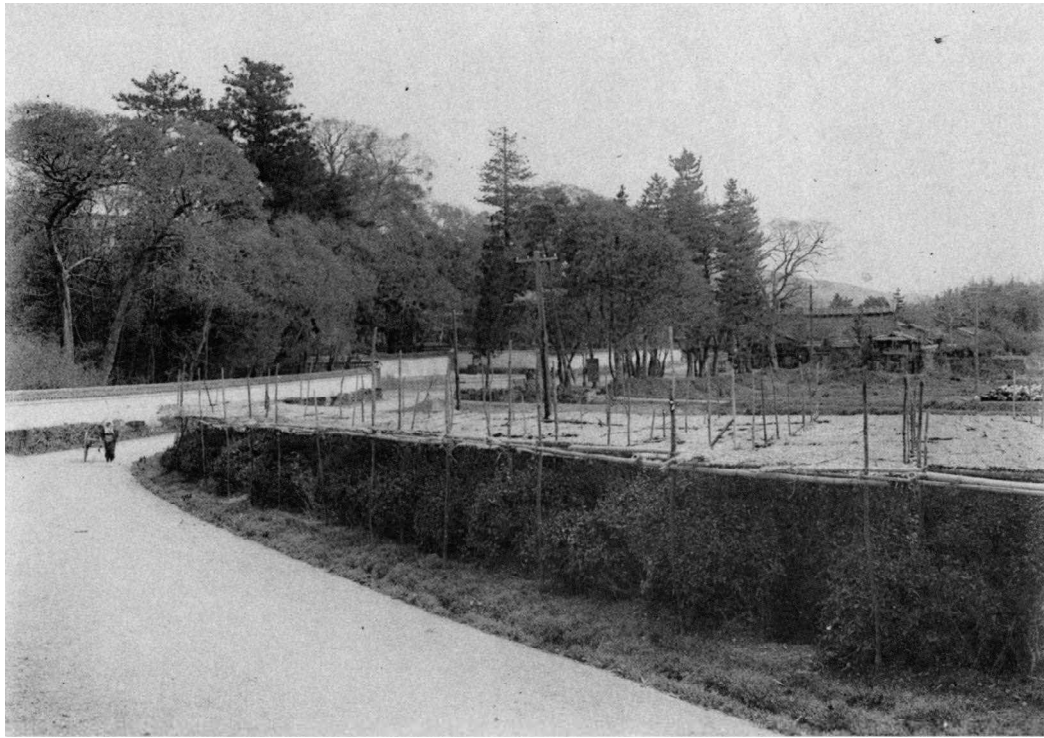
— 同 解説 —

玉露園に在りては、摘芽前に特別の方法にて日光の直射を防ぎ、同化作用を妨げ葉を鮮緑ならしめ、甘味を増し、特有の香味を生ぜしめる、之を覆架けと称し、次の材料によつて作らる。

- 丸太 (末口一寸二三寸、長十尺乃至十二尺、三百本)
- 太竹 (径二寸、長二十四尺、百本)
- 細竹 (径一寸、長二十尺、二百本)
- 葦簀 (長九尺、幅四尺五寸、三百枚)



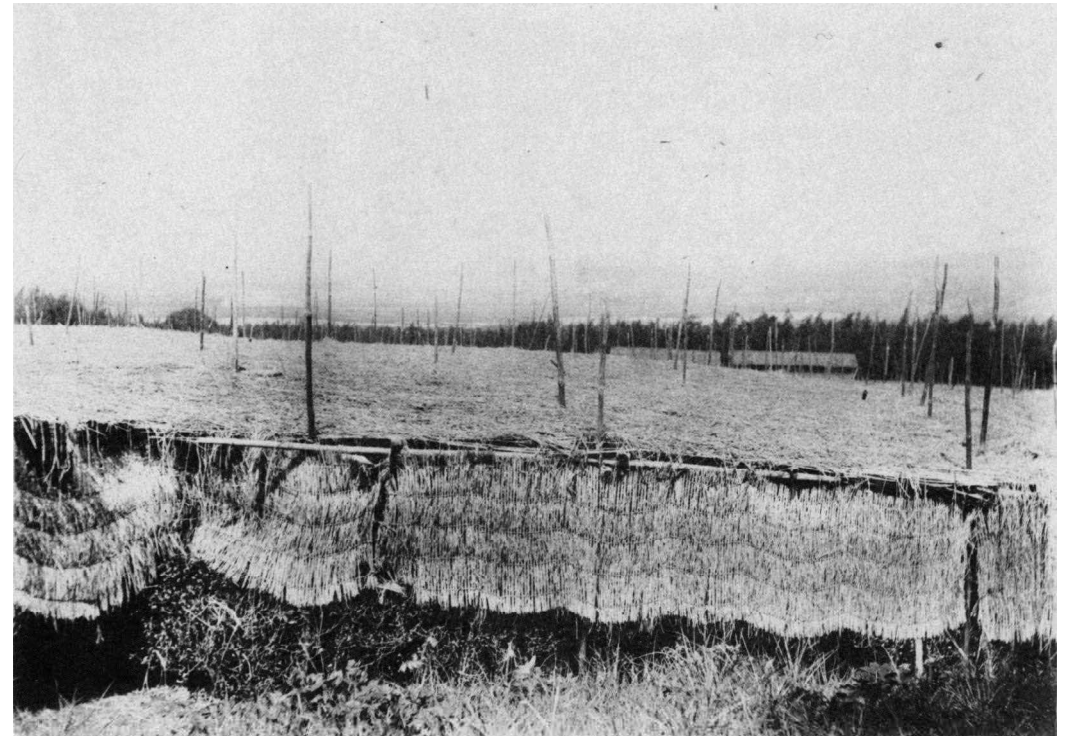
1-0125 K102 アナツキ (穴突き)
上図にある丸太を立てる穴を突くための棒。先は金属製。上図の解説には玉露とあるが、碾茶も同様。



『京都茶業写真総覧』 第四十二図 覆架け 其二

— 同 解説 —

茶の芽が二三芽開展するに至れば、予め設けられたる棚上に簀は拵げられるのである。之は覆架作業の第二次であつて写真は喫茶と関係の深い黄檗山萬福寺前の茶畑に、簀を拵げたる所である。



『京都茶業写真総覧』 第四十三図 覆架け 其三

— 同 解説 —

簀を拵げて十日ばかり後、其の上一反当り約百五十貫内外の藁が万遍なく撒り被せられ、周囲は菰を以て包まれた後の茶畑は殆ど日光を遮つて、内部は薄暗い状態となる。之から大概十日程経て、摘採に着手されるのであつて、写真は覆架作業を全く終つた後の茶園の状態である。



1-0124 N101 チャダル



1-0125 K105 ケンズイオケ

ケンズイは間食のこと。作業中の休憩時にとつた間食でオケも単にケンズイと呼ばれた。オケに食べ物、チャダルに茶を入れて茶園に運ぶ。



1-0125 K130 オイトリガマ

名前のお通り、茶園の覆いを取りこわす際に丸太や竹を結んでいた藁縄を切る鎌。もちろん、組み立て時にも使われる。



『京都府久世郡写真帖』 第八十四 宇治の茶摘乙女

— 同 解説 —

宇治の製茶は全国第一にして、其の名内外に喧伝す。玉露及碾茶を産出する茶園は、二十年以上に達せざれば不可能なり。当地方に於ける適良の茶園と称せらるるものは概ね三百年前後の星霜を経たるもの多し。新茶の時期には日光の直射を避くる為、蔽を設く。然れども煎茶には之を設けず、新樹緑を朝するの頃に至れば、諸方より集り来茶摘女、此の地の婦女子と相混し、白き手拭を被り、赤染の前垂を着け、緑十里の茶園に入り節面白く優に鄙びたる茶摘唄を歌ひて、嫩き芽を摘む状趣最も興あり。
(後略)



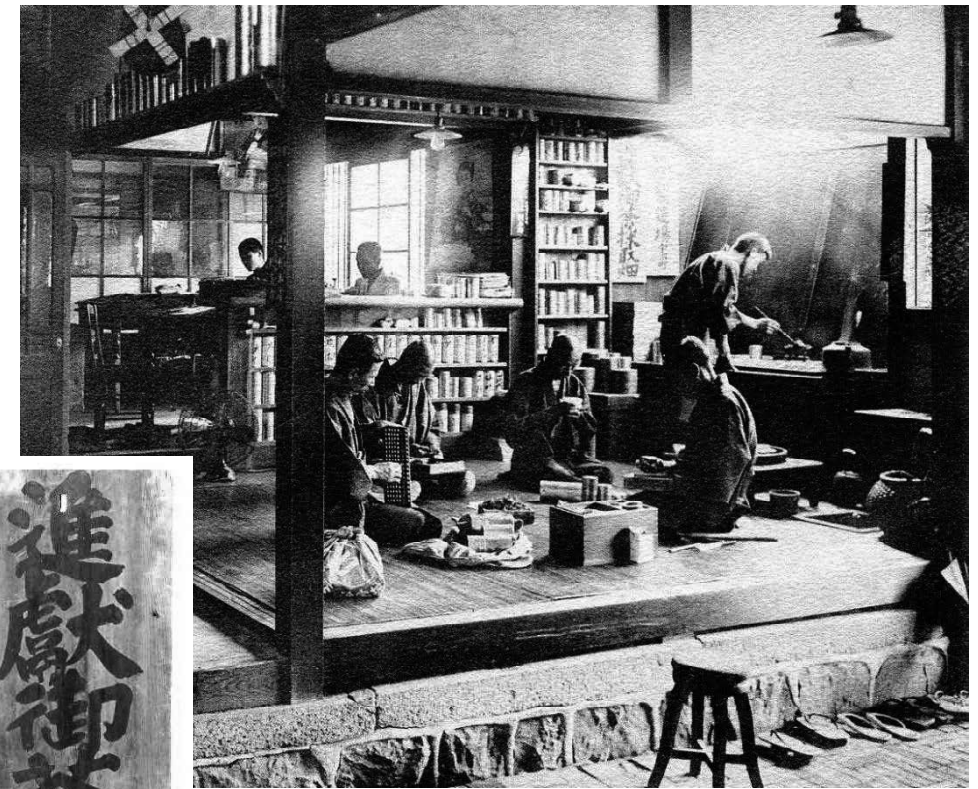
1-0894 チャツミカゴ

竹製のチャツミカゴ。ごく近年まで従来の素材のものが多く見られたが、現在では化学繊維製のものが主流。本資料は伝統的な素材と形状だが、ヒモは藁縄ではなくポリプロピレン（PP）製ロープ。



1-0068 29-10 茶運びカゴ

チャツミカゴと同様の形状だが、二回りほど大きい。大勢の摘み子が摘んだ茶の葉をまとめて運ぶ際のカゴ。シンドとも呼ばれる。



1-0160 32-43 看板「進獻御茶採取畑」

大正の大典に際して、江戸期の幕府による朝廷への茶壺献上にならない、宇治町から茶壺が献上された（『京都府久世郡写真帖』）。この看板は、献上茶を摘んだ茶園に掲げられていたもの。上図の茶商店頭拝見場横に掲げられる（『同書』第九十二 製茶検査より）。



1-0160 32-3 チャツミフダ (茶摘み札)

宇治の茶商が使用していた茶摘み札。茶を摘む「摘み子」が摘んだ茶の葉の重さを計測するたびに重量に応じた札を受け取り、後で精算し賃金が支払われる。現在では、計測ごとに伝票が手渡される。

この箱には362枚の札が入っていた。32-2の茶摘み札は、茶壺の箱に3424枚入っており、箱蓋裏には札の数を点検したリスト「目札枚数調べ」が貼付されていた。これにより、札が「目札」と呼ばれていたことがうかがえる（「摘み札」と呼ばれることも）。箱裏には4枚のリストが上に貼り継がれ、昭和22年度から30年度まで点検された枚数が判明する。最後の30年度の枚数と、32-2、3、23の3箱に納められていた枚数の合計が、50目を除きほぼ一致することから、このリストは当時この茶商のもとで使用されていたすべての枚数が点検されたものであること、昭和30年を最後にこれらの札が使われなくなったことが推定される（右上表）。あるいは、32-3の札も本来ならば毎年茶壺箱に戻されていたものが、しまわれずそのままになったのかもしれない。



10貫目以上の札には、一部に「8.5.21」の日付ゴム印が押される。寸法は、30頁参照。

茶摘み札ーリストの枚数と箱ごとの実物の枚数

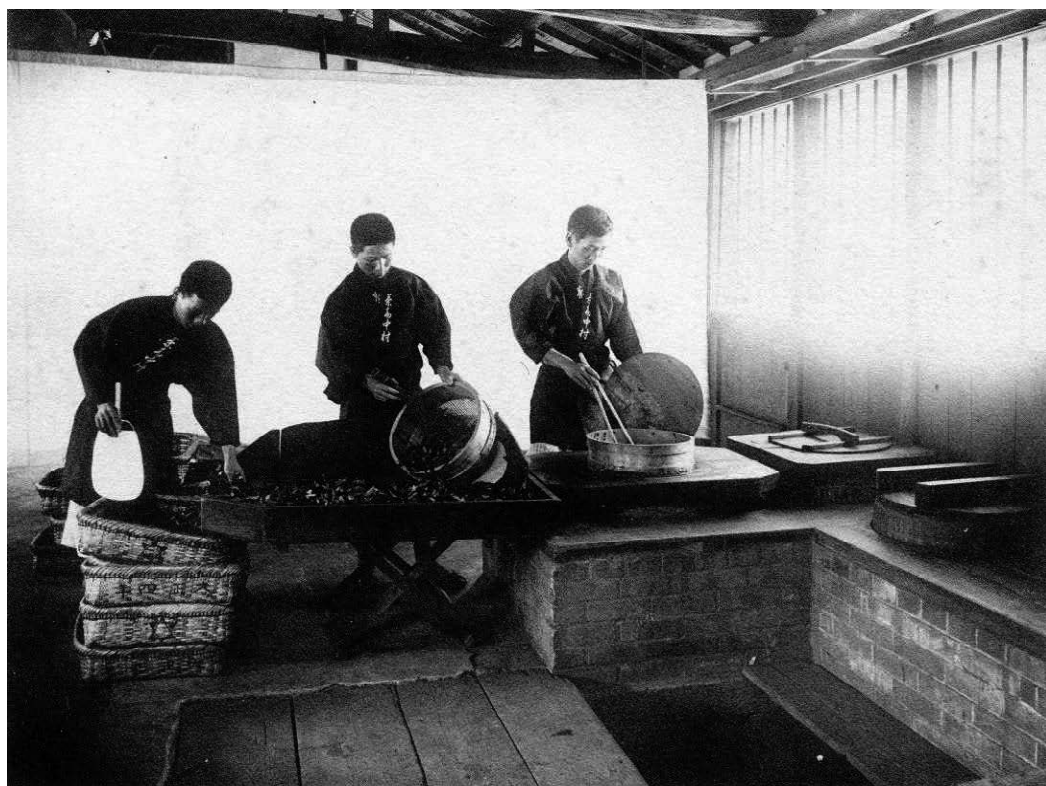
	リスト「目札枚数調べ」 昭和30年度	1-0160 32-2 茶摘み札	同 32-3 茶摘み札	同 32-23 茶摘み札	現存資料 32-2、3、23 合計
30貫目	25			25	25
20貫目	26			26	26
10貫目	24			24	24
1貫目	80	77			77
800目	38	31	2		33
700目	71	59	9		68
600目	78	70	5		75
500目	224	214	6		220
300目	63	41	24		65
200目	55	35	21		56
50目	2740	2673	295		2968
合計	3424枚	3200枚	362枚	75枚	3637枚



500目以上の札の大部分に「明治三十九年五月一日」の日付ゴム印が押される。寸法は29頁参照。



50目の札に「五十」とあるのはごく一部で、大部分はさまざまな印のみが押される。



『京都府久世郡写真帖』 第八十五 茶蒸場

— 同 解説 —

茶園に於て摘みたる新芽には、往々古葉、枯葉又は塵芥類混合の恐れあるを以て、精撰して蒸籠に入れ茶蒸釜にて蒸し上げ、冷台に撒布し団扇にて扇き、十分冷却したる後更に冷籠に入れ置き漸次焙炉場に移送す。而かも茶芽の硬軟に依て蒸し加減あり、且其巧拙に依り、茶の香味色沢に關係を及ぼす大なり、殊に玉露碾茶に対しては、最も熟練を要す。



1-0125 K115 サマシカゴ

蒸し上がった茶の葉をこのカゴにひろげて冷ます。



1-0125 K116 ミズオケ

蒸釜に水を足す際に使用する。



1-0125 K112 セイロ、K114 セイロのフタ(蓋)、1-0160 32-10 セイロのハシ(箸)

生葉を蒸すとき二枚一組で交互に使用する。蒸し上がりを均一にするため箸で攪拌する。



1-0103 S201 カマ

茶の葉を蒸すためのカマ。通常の釜より深く作られ、強い蒸気が長時間あがるよう改良されたもの。セキレイガマ（鶺鴒釜）とも呼ばれる。



1-0068 29-1 カゴ
底が四角形で上部は円形のカゴ。用途不明。
主に製茶の作業場で使われたものか。29-2、
3、4、13も同形状。



1-0068 29-5 チャブネ（茶舟）
製茶場内で大量の茶の葉を移動する際に使用
する。

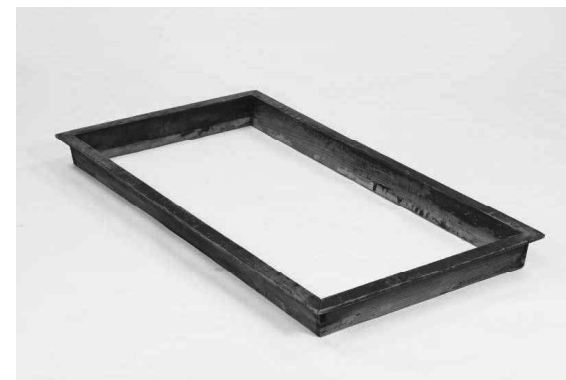


1-0068 29-9 チャブネ（茶舟）
同上。こちらはタタミ一枚分ほ
どの大きさがある大型のもの。



『京都府久世郡写真帖』 第八十六 茶焙炉場

— 同 解説 —
茶葉の能く冷却したる頃を待つて焙炉に移し、焙炉師の手に依つて能く揉み能く捻り
たる後、更に之れを煉焙炉にて乾燥するを以て製茶の順序とす。然れども尚其の作業
を細別するときは甚複雑なるものあり、殊に茶之香味色沢、水色等の三要素は、焙炉
の巧拙に依つて定まるものなれば最も熟練を要す。初夏新緑滴るの候、立ち上る焙炉
の香薫ばしく四辺に漲りて、今尚昔をしのぼしめ、此地に遊ぶものをして茶味に接せ
ざれば去る能はざらしむ、実に宇治は茶の名勝にこそ。
新茶古茶宇治はいそかし時鳥



1-0125 K119 ジョタンノワク（助炭の枠）
焙炉の上部にはめる枠。この内側に和紙を
厚く張り、下から炭で熱し茶の葉を乾燥す
る。



1-0125 K118 ガンプリ

焙炉内部の熱の調節や消火に使用。炭火を炉の中央に縦長に寄せ、その上にかぶせて空気を遮断し、消火する。



1-0125 K107-2 チャベラ (茶籠)

炭火の上で茶の葉を乾燥させる時に使用する。通常宇治では使用しないが、なぜか複数の家に伝来する。

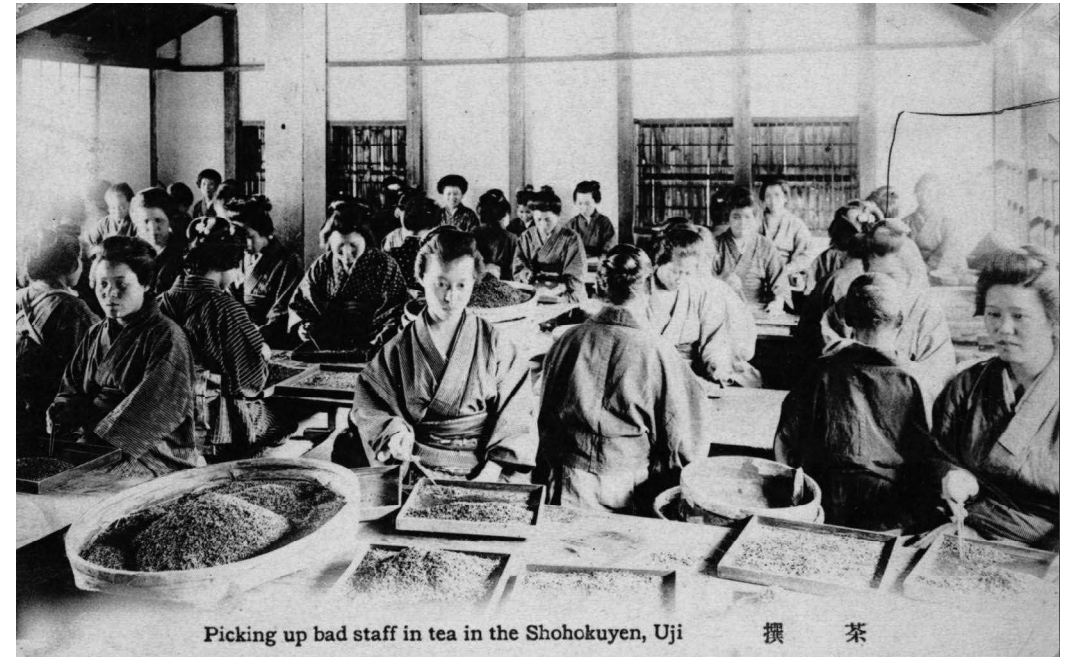
製茶 (撰別) の道具



『京都府久世郡写真帖』 第九十 茶撰別

— 同 解説 —

茶の揉捻後、能く乾燥したるものは、之れを紙張籠に入れて茶撰場に運び、女工をして赤葉、黄葉又は茎等の混合物を撰別せしむ。多数女工の茶撰唄をうたひつゝ撰別する其光景亦愛すべし。



Picking up bad staff in tea in the Shohokuyen, Uji 撰茶

絵はがきより「茶撰 (ちゃより)」



1-0160 32-22 ヨリイタ、
1-0125 K125 ヨリイタの
支え箱

畳一帖ほどの板の台で、板に黒漆や墨を塗った部分があり、この上で、茶の葉をていねいに撰り分ける。



1-1215-1 茶撰箸
撰別の最終段階で細かい作業をするために使われる。



1-0125 K109-1、5、6、7、9、K110 ボテ
竹籠に和紙を貼り柿渋を塗ったもの。撰別の写真にあるように、撰別（仕立て）作業場ではあらゆる工程でさまざまな形状のボテが使用された。白く見えるのは、後から張り足された紙である。



絵はがきより 「茶仕立（ちゃしたて）」



1-0125 K120-4 トオシ
茶葉のふるい分けや仕立て上がった茶の大きさを揃えるために使用。かつては藤で作られていたが、近年は竹で編んだものが多い。



1-0125 K121-3、6 ミ（箕）
両手でゆすって茶葉をおどらせるようにして茎と葉に撰別する。用途によって大きさを使い分ける。



『京都府久世郡写真帖』 第九十三 製茶容器詰

— 同 解説 —

製茶の貯蔵には、従来信楽焼茶壺を用ひしも、近来は鐘櫃と称し、長方形の箱の内部に鉄力板を張りたるものを用ゆ。又小売用としては、茶の上中下等の区別に従ひ、鉄力罐、又は紙袋に詰め置くなり。



1-0125 K123-3 ジョウゴ

茶の葉を茶壺に詰める際、口にさして使用する。竹材に紙を柿渋が塗ってある。



1-282-1、2、3 茶櫃

茶の葉を保存し、運ぶための木製の箱。内側にブリキを貼りつけたものが登場し、茶壺より気密性が向上した。ブリキが無いものはスピツと呼ぶ(1-2005)。



『京都府久世郡写真帖』 第九十四 製茶荷造

— 同 解説 —

製茶を地方に輸出する場合には、従来信楽焼の茶壺に渋紙を張りたるものを用ひたりしが、近来鐘櫃又は茶櫃を用ひ、其外を藁にて包み、縄を以て縦横十文字に、数ヶ所を縛るを例とす。尤も近傍の取引等には紙袋木綿袋等を用ゆるもの多し。



1-0183 49-13 茶壺

茶の葉を保存し、運ぶための陶器の壺。基本は信楽焼である。径が最も大きい部分に緩衝材として藁縄を巻く。その上に和紙を貼り柿渋を塗る。



1-0160 民30-1 茶壺

保存専用の大型の茶壺。蓋とその上にかぶせる保護紙を付す。慶応4年の陰刻銘がある。



1-0103 S202、1-0183 49-16 茶壺
やや小型の藁縄の無いタイプ。

■参考文献

本書の執筆にあたり直接参考にしたもののほか、宇治茶の歴史を学ぼうえで参考になると思われる文献を掲げた。

- 『京都府久世郡写真帖』 京都府久世郡 大正4年(1915)
- 『京都茶業写真総覧』 京都府茶業組合連合会議所 大正13年(1924)
- 『京都府茶業百年史』 京都府茶業会議所 平成6年(1994)
- 『宇治市史2 中世の歴史と景観』 宇治市 昭和49年(1974)
第4章第3節「茶業の発展と茶師」ほか
- 『宇治市史3 近世の歴史と景観』 宇治市 昭和51年(1976)
第1章第5節「茶師仲間と茶壺道中」ほか
- 『宇治市史4 近代の歴史と景観』 宇治市 昭和53年(1978)
第2章第5節「茶業の近代化」ほか
- 『宇治市史5 東部の生活と環境』 宇治市 昭和54年(1979)
- 『宇治市史6 西部の生活と環境』 宇治市 昭和56年(1981)
- 『宇治茶の文化史』(宇治文庫4) 宇治市教育委員会 平成5年(1993)
- 『宇治をめぐる人びと』(宇治文庫6) 宇治市歴史資料館 平成7年(1995)
- 『緑茶の時代 -宇治・黄檗の近世史-』(宇治文庫10) 宇治市歴史資料館 平成11年(1999)
- 『収蔵文書調査報告書3 上林三入家文書』 宇治市歴史資料館 2000年(平成12)
- 『収蔵文書調査報告書6 上林春松家文書』 宇治市歴史資料館 2004年(平成16)
- 『収蔵資料調査報告書9 上林春松家文書2』 宇治市歴史資料館 2007年(平成19)
- 『宇治茶一名所図から製茶図へ』 宇治市歴史資料館 昭和60年(1985)
- 『大名と茶師-三入宛書状を中心に-』 宇治市歴史資料館 平成5年(1993)
- 『宇治茶-トップブランドの成立と展開-』 宇治市歴史資料館 平成27年(2015)
- 『てん茶に生きる』 寺川俊雄 探求社 2004年(平成16)
- 『宇治茶を語り継ぐ』 堀井信夫 アースワーク 2006年(平成18)
- 『抹茶の研究』 桑原秀樹 平成24年(2012)
- 『お抹茶のすべて』 桑原秀樹 誠文堂新光社 2015年(平成27)
- 『日本茶の歴史』(茶道教養講座14) 橋本素子 淡交社 平成28年(2016)

謝辞

本書の執筆にあたり、茶業研究家の桑原秀樹氏にご教示をいただきました。記して謝意を表します。

本書は、「1 宇治茶の民具の概要」「3 空中写真に見る茶園」を小嶋正亮、「2 資料目録 宇治茶の民具」を大塚朋世、「4 民具を受入れ始めたころ-「たまり場」としての資料館-」を坂本博司が担当し、2の一部を岡本京子が補佐した。

■ 2 資料目録 宇治茶の民具

□凡例

- この目録は、収蔵資料のうち茶業に関する民具をまとめたものである。受入時期により資料No.の付与方法が異なる。それを明確にするため、A表（25頁）とB表（33頁）に分けて掲載した。A表の資料には「資料No.」（例：U101）のみを、B表の資料には「受入No.－資料No.」（例：282－1）を、ラベル、紙札、直接記入等の方法で付与している。
- 目録は、受入No.、地域、資料No.、資料名、備考の順に記した。各項目の記載内容は下記のとおり。
 - 受入No.) 「収蔵資料目録」に登録された受入資料ごとに付した番号。民俗資料については、原則として原蔵者ごとに受入番号を付与している。「1-〇〇」は館蔵資料を、「2-〇〇」は寄託資料をしめす。
 - 地域) 旧蔵者、原蔵者の居住地域を記した。
 - 資料No.) 上記のとおり、A表掲載の資料にはこれのみを、B表掲載の資料には受入番号と併記している。ただし、B表のうち1件1点の場合は資料No.は無い。
 - 資料名) 原則としてカタカナで記し、適宜漢字を補った。通常漢字で表記されるものは、それを活かした。
 - 備考) 資料の寸法等を記した。寸法の単位はcm。寸法の縦、横、高の表記は省略した。〇×〇は縦〇cm×横〇cmを、〇×〇×〇は縦〇cm×横〇cm×高〇cmをあらわす。墨書等の解読不能は□、[] でしめた。
- 資料No.はかならずしも連続しない。同一の受入No.に含まれる茶業以外の民具について、今回は対象としなかったためである。

■ A表

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考
1-0018	—	U101	セイロ（蒸籠）	径39×高10
		U102	セイロ	径46×高11
1-0052	小倉町	I108	製茶用下敷（渋紙）	286×288
1-0053	大久保町	K301-1	ボテ（角・蓋付き）	45×34×30 墨書「やまに」「七□ 萬 □ 納」
		K301-2	ボテ（角・蓋付き）	45×34×30
		K301-3	ボテ（角・蓋付き）	45×34×30
1-0063	槇島町	23- 1	イカキ	径55.5×高18.5
		23- 2	サマシカゴ（冷まし籠）	68×51×10
		23- 3	サマシカゴ	68×51×10
		23- 4	サマシカゴ	66×49×9
		23- 5	サマシカゴ	71×57×10 墨書「久保田政 []」
		23- 6	サマシカゴ	51.8×70.5×11
		23- 7	サマシカゴ	69×45×10
		23- 8	サマシカゴ	68×53×10
		23- 9	ボテ	径91×高12
		23-10	ボテ	径82×高10 骨のみ
		23-11	ボテ	径83×高10 骨のみ
		23-27	セイロ（蒸籠）	径36.5×高11.5 墨書「川北 []」 焼印「半」
23-62	サマシカゴ	69.5×53×10		
1-0065	小倉町	27- 1	チャツミカゴ（茶摘み籠）	径40×高40 墨書「昭和三十六年 新調 家庭用」
		27- 2	チャツミカゴ	径40×高41 墨書「昭和三十八年 五月新調 榎」
		27- 4	トオシ（篩）	径61×高10
		27- 5	トオシ	58×58×10 墨書有り判読不能
		27- 6	トオシ	径60×高10
		27- 7	ミ（箕）	40×51×14.5
		27- 8	ミ	36×48×13 墨書「榎茶屋次郎 詰物専用 榎八左衛門 □枝」
		1-0068	菟道	29- 1
29- 2	カゴ	径65×高29 墨書「大正十年 五月新調 菟道 タムラ」		
29- 3	カゴ	径64×高29 墨書「大正十年 五月新調 菟道 タムラ」		

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考		
1-0068	菟道	29- 4	カゴ	径66×高29 墨書「大正十五年 五月新調 菟道 タムラ」		
		29- 5	チャブネ (茶舟)	90×65×22		
		29- 6	チャブネ	160×104×30 墨書「菟道 タムラ 明治四十四亥五月 菟道 たむら」		
		29- 7	チャブネ	165×107×28 墨書「菟道 タムラ 明治四十四亥五月 菟道 たむら」		
		29- 8	チャブネ	157×100×25 墨書「明治三十六年新調 タムラ」		
		29- 9	チャツミカゴ (茶摘み籠)	径42×高42 墨書「たむら 菟道 タムラ」		
		29-10	茶運びカゴ (シンド)	径64.5×高58 墨書「宇治村 字菟道」		
		29-11	トオシ	88×88×17 墨書「明治四拾貳年 宇治村字菟道 たむら」		
		29-12	茶櫃	72×49×62 墨書「菟道田村」		
		29-13	カゴ	径65×高28 墨書「大正十年五月新調 菟道タムラ」		
		1-0069	志津川	30- 1	茶壺 (蓋付)	口径36×高96 墨書「なかさわ 清藏 中清」 蓋墨書「山城 宇治 志津川 中沢」 口縁部陰刻「慶応四年戊辰年」
				30- 2	茶壺 (蓋付)	口径23×高64.5 墨書「城州 宇治 志津川」
		1-0070	大久保町	34-12	ミ (箕)	22×24.5
34-13	ミ			26×39		
37-14	ミ			32×40		
1-0072	木幡	37- 1	根切り	長96 陰刻「桑原」		
		37- 2	不明 (エブリ状)	長102.5 墨書「昭和二五年七月新調」		
1-0075	広野町	46-31	メカケカゴ (目掛け籠)	径46×高25		
		46-32	メカケカゴ	径45×高28		
		46-33	サマシカゴ (冷まし籠)	71.5×60×11.5		
		46-34	サマシカゴ	71.5×61×11		
		46-35	サマシカゴ	73×60×11		
		46-36	サマシカゴ	72.5×58.5×10		
		46-37	サマシカゴ	72×59×11.5		
		46-38	サマシカゴ	73×59×11.5		

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考		
		46-39	サマシカゴ	73×60×12		
		46-40	サマシカゴ	73×59.5×11		
		46-41	サマシカゴ	72×60×11		
		46-42	サマシカゴ	72×58×11		
1-0097	—	42- 1	茶壺	口径28×高82		
1-0103	宇治	S201	カマ (釜)	口径55×高64		
		S202	茶壺	口径21.5×高56 底裏墨書「文」		
		S203	カマの木杵	56×59×9		
1-0124	広野町	N101	チャダル (茶樽)	径23×高34.2 墨書「宇治 神明」 焼印「西吉」		
		N102- 1	チギ (千木)	長140.5		
		N102- 2	フンドウ (分銅)	2貫		
		N102- 3	フンドウ	4貫		
		N102- 4	フンドウ	12貫		
		N102- 5	フンドウ	23貫		
		N102- 6	フンドウ	不明		
		N103- 1	チャツミカゴ (茶摘み籠)	径44×高41 墨書「昭和十五年十月 神明西村」		
		N103- 2	カゴ	径54.5×高36.5 墨書「□神明□ 明治□五年」		
		N113	茶壺	口径22.5×高55		
		1-0125	菟道	K101	ツチノコ	29個 長15.7 木箱(45×35×11)入り
				K102	アナツキ(穴突き)	ドウツキとも 長178 焼印「小林」
				K103	パッチョガサ(笠)	径56 墨書「小林」 内墨書「みむろ 小林」
K104	ドミノ (蓑)			長105		
K105	ケンズイオケ (間水桶)			径28.9×高33.5 蓋付 「ケンズイ」 とも		
K107- 1	チャベラ (茶籠)			径77 バスケット・ファイヤ用		
K107- 2	チャベラ			径75 バスケット・ファイヤ用		
K108	メカケカゴ (目掛け籠)			52×52×26		
K109- 1	ボテ			径46×高7		
K109- 2	ボテ			径37.5×高5		
K109- 3	ボテ			径39×高7		
K109- 4	ボテ			径37×高6		
K109- 5	ボテ			径30×高7		
K109- 6	ボテ	径33×高6				

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考
		K109- 7	ボテ	径40×高14
		K109- 9	ボテ	径37.5×高10.5
		K109-11	ボテ	径77×高7
		K109-15	ボテ	径87×高15
		K109-18	ボテ	径37×高18
		K109-19	ボテ	径44.5×高11
		K110	ボテ	径47×高5.5 薄型 ヒラバリとも
		K111	チャブネ (茶舟)	155×105×25
		K112	セイロ (蒸籠)	径39×高11.3
		K113	セイロのハシ(箸)	長46
		K114	セイロのフタ(蓋)	径39 把手付
		K115	サマシカゴ (冷まし籠)	70×53.5×11 墨書「明治四拾参年戊五月新調 小林氏」
		K116	ミズオケ (水桶)	径19.5×高31.5
		K117	カマノワク (釜の枠)	径41×高12
		K118	ガンブリ	56.5×32 瓦製
		K119	ジョタン (助炭ノワク (枠)	169.5×89×13
		K120- 1	トオシ (篩)	径82×高24
		K120- 2	トオシ	径71.5×高18.5 墨書「□の春 []」
		K120- 3	トオシ	径66.5×高14 墨書「明治 []」
		K120- 4	トオシ	径62×高11.5 墨書「明治六酉之歳西山」
		K120- 5	トオシ	径60×高14 墨書有り判読不能
		K120- 6	トオシ	径59×高1 墨書「明治廿六年巳之歳西出 茶用」
		K120- 7	トオシ	径61×高14 墨書有り判読不能
		K120- 8	トオシ	径58.5×高12 墨書「明治三拾年 菟道村 小林 吉」
		K120- 9	トオシ	径47×高8.5 墨書「菟道 小林 七」
		K121- 1	ミ (箕)	67×87×24
		K121- 2	ミ	53×65.5
		K121- 3	ミ	59×65
		K121- 4	ミ	58×65
		K121- 5	ミ	45×50
		K121- 6	ミ	25×27
		K123- 2	ジョウゴ (漏斗)	径50×高34

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考
		K123- 3	ジョウゴ	径18.3×高23
		K124	茶壺	径38×高88
		K125- 1	ヨリイタ(撰り板)	143×74.5
		K125- 2	ヨリイタの支え箱	55.5×35.5×18
		K125- 3	ヨリイタの支え箱	55.5×35.5×18
		K127- 1	チギ (千木)	長64
		K127- 2	チギ	長38
		K127- 3	フンドウ (分銅)	4貫
		K130	オイトリガマ (覆取鎌)	長21
		K131	シンド	径50 高56 墨書「甚」
1-0160	宇治	32- 1	銭箱	46.5×31×36.5 墨書「文化十二年乙亥九月吉日新調 榎屋嘉 []」
		32- 2	チャツミフダ (茶摘み札)	茶壺箱 (32.5×32.5×44.5) 入り 札3200枚 内訳 1貫目： 77 800目： 31 700目： 59 600目： 70 500目： 214 300目： 41 200目： 35 50目： 2673 同およその寸法 (単位はmm) 1貫目： 70×48×2 800目： 70×40×2 700目： 65×30×5 600目： 73×32×4 500目： 58×31×7 300目： 49×25×4 200目： 38×24×5 50目： 30×15×2～ 32×22×4
		32- 3	茶摘み札	木箱 (18.8×29.5×15) 入り 札295枚 内訳 800目： 2 700目： 9 600目： 5

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考
				500目： 6 300目： 24 200目： 21 50目： 295 同およその寸法は32-2に同じ
		32- 5	セイロ (蒸籠)	径40×高1
		32- 6	セイロ	径40×高9
		32- 7	セイロ	径40.5×高12
		32- 8	セイロ	径41×高10
		32- 9	セイロのフタ(蓋)	径40.5 取っ手付
		32-10	セイロのハシ(箸)	長53
		32-11	セイロのハシ	長41.5
		32-12	セイロのハシ	長48.5 (一本のみ)
		32-14	ソロバン (算盤)	33.5×11×3 陰刻「遠州掛川町 小笠茶 溝口隆一商店 電話三七〇番」
		32-16	ソロバン	33.5×11×3 陰刻「和洋紙 茶袋 印刷 木村清三郎」
		32-17	証文挟み	35.5×7 墨書「茶買入ぼく 証文挟 辻氏」
		32-18	前掛け	72.5×49 未使用のし紙とも 「宇治茶 茶問屋 辻利一本店」
		32-19	前掛け	未開封 のし紙とも
		32-21	ヨリイタ(撰り板)	130×61 墨書「明治第拾七五月調之 倉谷幸三良 数六枚之内」
		32-22	ヨリイタ	163×128 墨書「清小菊」
		32-23	茶摘み札	チーイングム紙 (16.1×23.5×9.5) 箱入り 摘み札75枚 内訳 30貫目：25 20貫目：26 10貫目：24 同およその寸法 (単位はmm) 30貫目：78×47×7 20貫目：77×47×7 10貫目：93×46×4
		32-24	蒸釜のへら	長94
		32-37-1	茶臼の引き手	20.5×9
		32-37-2	茶臼の引き柄	45×26
		32-37-3	茶臼の引き柄	38×36.5

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考
		32-37-4	茶臼の引き柄	39×61 軸付
		32-37-5	茶臼の引き柄	44×52.5 軸付
		32-37-6	茶臼の引き柄	55×54.5 軸付
		32-37-7	茶臼の引き柄	44.5×58 軸付
		32-37-8	茶臼の引き柄	44×47.5 軸付
		32-38	製茶技能優勝旗	65×97 木箱 (89×15×14.5) 入り 旗「製茶手揉競技会 第二位 優勝 山城宇治 辻利一商店」 旗竿 (三本継ぎ) 径2×長184 箱蓋裏ラベル「新案特許旗製造発売元 合名会社 平岡国旗本店謹製 京都・四 条・西洞院」
		32-43	看板「進献御茶採 取畑」	95.5×33
1-0183	宇治	49- 1	ナベ (鍋)	径56×高17.5
		49- 2	ナベノフタ(蓋)	径55
		49- 3	ナベノワク(杵)	径63 鉄製
		49- 4	ナベ	径47×高19
		49- 5	ナベノフタ	径41
		49- 6	ナベノワク	径56 鉄製
		49- 7	カマ (釜)	径42×高27
		49- 8	カマノワク	径44 鉄製
		49- 9	オケ (桶)	径36×高42
		49-10	ヒシヤク (柄杓)	長150
		49-11	トオシ (篩)	径46×高11
		49-12	茶壺	口径28×高84 貼札「ろ四」
		49-13	茶壺	口径30×高85 貼札「ろ口」
		49-14	茶壺	口径31×高82 貼札「こ十三」
		49-15	茶壺	口径31×高82 貼札「ほ十二」
		49-16	茶壺	口径24×高63.5
		49-18	ムシガマ(蒸し釜)	径60×高64
		49-19	ムシガマ	径50×高54
		49-20	ボテ (角型)	99×54.5×17.5 チャブネ転用
		49-21	ボテ (角型)	100×59×17 チャブネ転用
		49-22	ボテ (角型)	46×41.5×14
		49-23	ボテ (角型)	48×43×17
		49-24	ボテ	径58×高8.5
		49-25	ボテ	径63×高5.5

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考
		49-26	ボテ	径65×高10
		49-27	ボテ	径56.5×高7
		49-28	ボテ	径55.5×高9
		49-29	ボテ	径64×高12.5
		49-30	ボテ	径61×高13.5
		49-31	ボテ	径58.3×高16
		49-32	ボテ	径51×高7.5
		49-33	ボテ	径51×高8
		49-34	ボテ	径42×高6.5 トオシ転用
		49-35	ボテ	径42×高9.5
		49-36	ボテ	径39×高8 セイロ転用
		49-37	ボテ	径39×高8 セイロ転用
		49-38	ボテ	径40×高10 セイロ転用
		49-39	ボテ	径39.5×高10 セイロ転用
		49-40	ボテ	径38×高11 セイロ転用
		49-41	バッチョガサ(笠)	径56 内墨書「池庄」
		49-47	ボテ	径37×高13
		49-48	ボテ	径33×高15
		49-49	ボテ	径37×高17.5
2-0010	宇治	T101	ヨリイタ(撰り板)	153×68.2 墨書「明治四十三年八月新調 寺川大福園」
		T102-1	焼印「ウジ今内十一」	長29
		T102-2	焼印「宇治町役場」	長38.5
		T103	カマ(釜)	径54×高35
		T104	ボテ	径59×高70
		T105	スキ	長102 クキキリ用
		T106	クキキリの箱	42×30×17 ヨリイタ台
		T108	フンドウ(分銅)	高9 20貫目
		T109- 1	ボテ	径37×高36
		T109- 2	ボテ	径42.5×高12.5
		T109- 3	ボテ	径49.5×高8.5 墨書「宇治町 寺川大福園」
		T110	茶臼の引柄	44.5×53
		T112-1	茶べら	径80
		T112-2	茶べら	径95

■ B表

受入No.	地域等	資料番号	資料名	備考
1-0282	—	1	茶櫃	32×22×23.5 墨書「煎茶 中之下(正喜撰) 百匁一・五〇」 ラベル「茶問屋 山城国宇治町 佐久間芳文園謹製」
		2	茶櫃	40.5×27.5×29 墨書「粉茶 百匁〇・三六」 ラベル「茶問屋 山城国宇治町 佐久間芳文園謹製」
		3	茶櫃	56×36.5×39 墨書「清香」 ラベル「陸軍省御用達 山城国宇 [] 佐久間芳 []」 墨書「宇治 本場 銘茶」
		4	茶櫃	72×48.5×60.5 ラベル「陸軍省御用達 山城国宇治町 佐久間芳文園」
		5	茶櫃	40.4×27.5×29.5 墨書「並 粉茶 百匁」 ラベル「茶問屋 山城国宇治町 佐久間芳文園謹製」 墨書「宇治 本場 銘茶」
		6	茶櫃	58.5×35.5×40.5
		7	茶櫃	72×49×61 墨書「ほうじ茶」
1-0576	菟道	1	マエダリ(前垂)	65×65 昭和40年頃 一幅半
		2	テホイ(手覆)	1対
		3	ハンチャ	68×124 単衣上半衣
		4	着物	以上3点は茶摘み装束 142×124 緋単衣野良着(農作業用着物)
1-0894	—		チャツミカゴ	径43×高40 墨書「清水屋」
1-1215	白川	1	茶撰箸	全長23.5 袋墨書「大正拾三年拾月 茶撰箸入 桂よね」
		2- 1	印判「山吹」	判面5.4×1.8
		2- 2	印判「正喜撰」	判面5.6×1.4
		2- 3	印判「池の尾」	判面5.7×1.4
		2- 4	印判「喜撰」	判面4.0×1.8
		2- 5	印判「玉露」	判面5.2×1.3
1-1288	神明	1	茶櫃	72.5×48.5×60 墨書「宇治 森六」 「宇治 茶」
1-1318	白川	1- 1	茶かぶき札箱	54×28×2.5 墨書「明治四拾五年三月 二日大会記 撰茗社」
		1- 2	茶かぶき札	5種31枚(鶴10、竹8、風6、月4、雲2、草1)

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考
		2	オイトリガマ (覆取鎌)	長23
		3	オイトリガマ	長28
		4	オイトリガマ	長24
		5	オイトリガマ	長23.5
		6	チャバサミ (茶鋏)	長58
		7	チャバサミ	長60.5
		8	チャバサミ	長61
		9	チャダル (茶樽)	径15×高25
1-1319	六地藏	1	チャツミカゴ (茶摘み籠)	径43.5×高43 墨書「西村」
		2	チャツミカゴ	径42.5×高43 墨書「西村」
		3	チャツミカゴ	径43×高43.5 墨書「西村」
		4	チャツミカゴ	径42.5×高43 墨書「西村」
		5	チャツミカゴ	径42.4×高44 墨書「西村」
		6	チャツミカゴ	径42.5×高43.5 墨書「西村」
		7	チャツミカゴ	径43×高43 墨書「西村」
		8	シンド (蓋付)	径42×高43
		9	ボテ (角型、蓋付)	45×35×25
		10	ボテ (角型、蓋付)	45×38×28
		11	サマシカゴ (冷まし籠)	70×52×10 墨書「西村 大正四年五月」
		12	サマシカゴ	70×49×10
		13	サマシカゴ	63×45×10
		14	バッショガサ (笠)	径56 墨書「六地藏 西村」
		15	バッショガサ	径56.5 墨書「六地藏 西村」
		16	バッショガサ	径56 墨書「六地藏 西村」
		17	バッショガサ	径56 墨書「六地藏 西村」
		18	チャダル (茶樽)	径26×高27.5 焼印「六猿太」
		19	チギ (千木)	全長63
		20	フンドウ (分銅)	径5.5×高8 釣鐘型 4貫
		21	チギ	全長63
		22	ハカリ	全長23.5 5貫
		23	木箱 (茶摘み札入れ)	44×24.5×11 取っ手付 蓋裏朱書「三ノ内 組屋鋪 津田氏」
		24	茶摘み札	札等220枚 (一部ブリキ札付) 内訳 50貫目 : 2 3貫目 : 5

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考
				1貫500目 : 1 1貫50目 : 1 1貫目 : 16 950目 : 2 900目 : 5 850目 : 2 800目 : 7 750目 : 1 700目 : 7 650目 : 2 600目 : 9 550目 : 3 500目 : 18 450目 : 1 400目 : 13 350目 : 5 300目 : 8 250目 : 3 200目 : 28 150目 : 4 100目 : 9 50目 : 47 その他木札 : 11 ブリキ札のみ : 10 同およその寸法 (単位はmm) 木製札 : 55×35×7~34×23×8 札の大きさと目方は比例しない ブリキ札 : 70×32、118×32
1-1319	六地藏	25- 1	印判「山城 宇治 西村太郎兵衛製」	判面3.9×2.9
		25- 2	印判「西村太郎兵衛」	判面7.1×2.1
		25- 3	印判「正味百目詰」	判面4.1×1.8
		25- 4	印判「½ LBS」	判面0.7×3.2
		25- 5	印判「六地藏衛生組合之印」	判面1.7×1.7
		25- 6	印判「会 宇治村在郷軍人会講領収」	判面1.7×1.1

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考
		25- 7	印判「親展」	判面3.7×1.9
		25- 8	印判（飛鳥の図）	判面1.6×5.3
		25- 9	印判（鳥の図）	判面4.1×2.5
		25-10	印判「玉露」	判面3.1×1.1
		25-11	印判「煎茶」	判面3.1×1.1
		25-12	印判「煎茶粉」	判面2.6×1.1
		25-13	印判「雁ヶ音」	判面2.6×1.1
		25-14	印判「雁玉」	判面4.2×1.8
		25-15	印判「上別儀」	判面2.6×1.2
		25-16	印判「別儀」	判面2.6×1.2
		25-17	印判「広葉」	判面2.6×1.2
		25-18	印判「極揃」	判面2.6×1.2
		25-19	印判「並揃」	判面2.6×1.2
		25-20	印判「別儀昔」	判面2.6×1.1
		25-21	印判「昔詰」	判面2.6×1.2
		25-22	印判「極詰」	判面2.6×1.2
		25-23	印判「白昔詰」	判面2.6×1.1
		25-24	印判「間詰」	判面2.6×1.1
		25-25	印判「祝昔」	判面2.6×1.1
		25-26	印判「後昔」	判面2.6×1.1
		25-27	印判「別製 初昔」	判面2.6×1.1
		25-28	印判「松ノ白」	判面2.6×1.1
		25-29	印判「友白髪」	判面2.6×1.2
		25-30	印判「翁」	判面2.6×1.1
		25-31	印判「白折」	判面2.6×1.1
		25-32	印判「玉ノ折」	判面2.6×1.2
		25-33	印判「折鷹」	判面2.6×1.1
		25-34	印判「宇文字」	判面2.6×1.1
		25-35	印判「池ノ尾」	判面2.6×1.2
		25-36	印判「相生」	判面2.6×1.1
		25-37	印判「寿」	判面1.7×1.1
		25-38	印判「玉桂」	判面3.6×1.3
		25-39	印判「川柳」	判面4.3×1.6
		25-40	印判「川柳」	判面2.7×1.2
		25-41	印判「特別 川柳」	判面2.7×1.1
		25-42	印判「青柳」	判面2.6×1.2
		25-43	印判「初緑」	判面3.7×1.3
		25-44	印判「初緑」	判面2.6×1.2

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考
		25-45	印判「露の光」	判面3.7×1.3
		25-46	印判「延寿」	判面2.6×1.1
		25-47	印判「朝日園」	判面2.6×1.1
		25-48	印判「清風」	判面2.6×1.1
		25-49	印判「松濤」	判面2.6×1.1
		25-50	印判「徒然」	判面2.6×1.2
		25-51	印判「残月」	判面2.6×1.1
		25-52	印判「紫丹」	判面2.6×1.2
		25-53	印判「霜ノ花」	判面2.7×1.2
		25-54	印判「碧海」	判面2.7×1.2
		25-55	印判「正喜撰」	判面2.6×1.3
		25-56	印判「山路」	判面2.6×1.1
		25-57	印判「上玉真」	判面2.6×1.2
		25-58	印判「中玉真」	判面2.6×1.1
		25-59	印判「下玉真」	判面2.6×1.2
		25-60	印判「喜撰」	判面2.6×1.1
		25-61	印判「麓の雫」	判面2.6×1.1
		25-62	印判「鳳凰殿」	判面2.6×1.2
		25-63	印判「岸雪」	判面2.6×1.2
		25-64	印判「喜撰粉」	判面2.7×1.2
		25-65	印判「松濤粉」	判面2.6×1.1
		25-66	印判「無銘」	判面2.6×1.1
		26	ボテ	径43×高13.5
		27	ボテ	径40.5×高10.5
		28	ボテ	径44×高13
		29	ボテ	径51×高16
		30	ボテ	径60×高12
		31	ボテ	径56.5×高11
		32	机	90.5×38×22 墨書「明治参拾参年八月吉日 山城国宇治郡六地藏 西邨口郎 之新調」
		33	ヨリイタ(撰り板)	154.5×78
		34	ヨリイタ	103×64
		35	ヨリイタ	151×79
		36	ヨリイタ	150.5×72.5
		37	ヨリイタ	151×80.5
		38	茶壺	径31×高88 墨書「山城宇治 風蓋無五十斤 大西安 []」

受入No.	地域	資料No.	資料名	備考
		39	茶壺	径32×高84 墨書「山城宇治 風蓋無五十斤 大西安 []」
		40	茶壺	径34.5×高86 貼札「松本葉」
		41	茶唐箕	48×91×121.5 墨書「福知山市北本町厚村屋製作所」 ラベル「芦田桂一農具製作所 山陰線福知山市」
		42	ヨリイタ	127×70 墨書「太」
1-1501	白川		茶櫃	31×22×25 墨書「茶 見本 白水園 宇治白川 桂」
1-1988	—		茶壺	径32.5×高82
1-2004	宇治	1	茶櫃	61×41×45
		2	茶櫃	67×41.5×36 墨書「茶問屋宇治上林製」
		3	茶櫃	31×22×25 墨書「茶問屋宇治上林製」
1-2005	伊勢田町		茶櫃 (スピツ)	53.5×33.5×41 内側ブリキ張り無し 墨書「宇口小口北川 []」 黒マジック「伊セ田公 []」
1-2007	—		ジョウゴ (漏斗)	径45×高23
1-2009	宇治	1	茶臼	径35×高25 取っ手付
		2	茶臼	径35×高25

3 空中写真に見る茶園

昭和36年(1961)5月1日に国土地理院が撮影した空中写真により、当時の市域の茶園の分布状況を紹介します。現在の市域を空から見ると、西部の巨椋池干拓地に残る農地と東部山間地を除けば、平地から丘陵地帯にかけてびっしりと住宅に埋め尽くされる状況が見られるだろう。だが、昭和36年当時、住宅開発は市域の一部で始まったばかりであった。

当時の空中写真は、現在とは違いモノクロ写真である。モノクロでなぜ茶園の存在が判別できるのか。それは当地ならではの覆い下茶園の被覆方法にある。現在の市域の茶園は、大部分が抹茶の原料となる碾茶園であるが、当時は現在よりも煎茶園の割合が多いとは言え、同様の傾向が見られた。碾茶の場合、新芽が出はじめる前、四月なかばから茶摘みを終える五月末頃にかけて、初夏の日射をさえぎり新芽をおだやかな環境で生育させるため、またそれを霜害から守るため、茶園に覆いを架ける(5~7頁参照)。まず細い丸太棒を等間隔に立て、竹を渡して骨組みをつくり葎をかける。さらにその上一面に藁を葺く。こうした茶園をモノクロで撮影すると、白っぽいそしてややびつな矩形となる。覆いの方法も、現在では省力化をはかるため化学繊維製の黒い寒冷紗にとってかわった。それは昭和40年代以降のことと言う。次頁以降の写真は、伝統的な茶園景観が広がるほぼ最末期の記録ともなった。



空中写真索引図

1 六地藏・木幡

京阪電車六地藏駅

山科川

木幡池

茶園

京阪電車木幡駅

国鉄木幡駅
(現JR)

宇治川

茶園

二子塚古墳

隠元橋



昭和36年(1961)年5月1日

MKK614-C11-6750

茶園

市域平野部の北端、
六地藏・木幡地域。
左画面右よりを南北
に京阪電車宇治線、
旧街道、国鉄(現JR)
奈良線、府道が
近距離で並行する。
茶園はこれら付近と
やや山側に集中して
見られる。

東宇治中学校

宇治小学校



隠元橋
 宇治川
 自衛隊宇治駐屯地
 京都大学宇治校舎
 茶園
 横島小学校
 茶園



宇治小学校
 万福寺
 京阪電車黄檗駅
 国鉄黄檗駅
(現JR)
 茶園
 京阪電車三室戸駅
 菟道稚郎子墓

前頁「1六地藏・木幡」の南に接続する地域で、北から五ヶ庄、菟道と続く。やはり京阪電車や旧街道沿いとその山側に茶園がひろがる。それに加え、宇治川右岸河川敷とその付近にも茶園が営まれる。

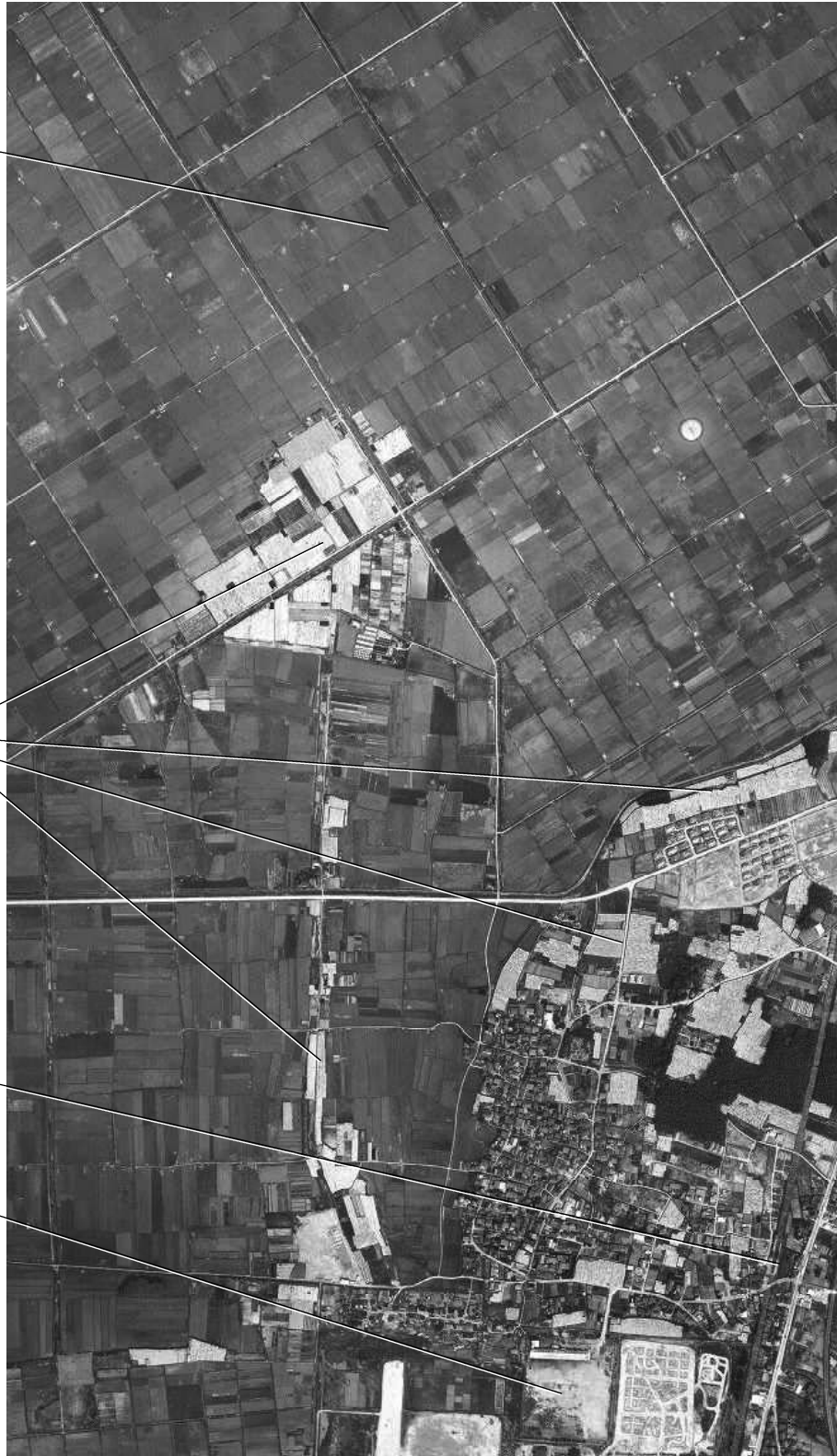


巨椋池干拓地

茶園

奈良電車伊勢田駅
(現近鉄電車)

西宇治中学校

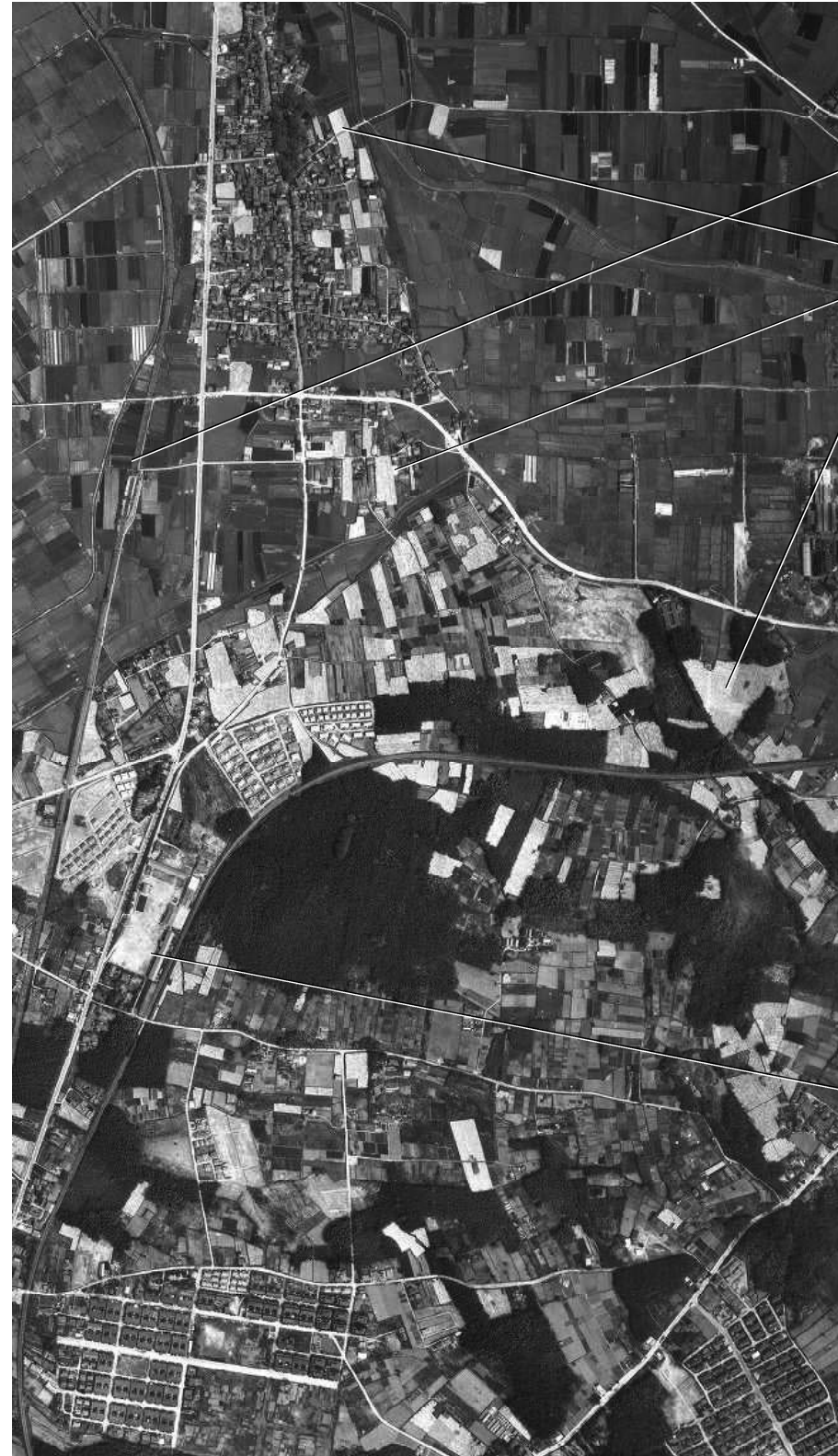


奈良電車小倉駅
(現近鉄電車)

茶園

前頁「2五ヶ庄・菟道」の左下、西南に位置するこの地域では、画面の左上が水田で右下に山、その間に茶園が分布する。このほか、左画面を南北に茶園が細く続き、その北端に集中するが、これは巨椋池干拓前の名木川旧流路と河口部。

小倉小学校



日本レイヨン宇治工場

宇治市役所

国鉄宇治駅
(現JR)

茶園

菟道第二小学校



京阪電車宇治駅

茶園

宇治橋

平等院

菟道小学校

茶園

「2五ヶ庄・菟道」
の南、前項の東に続
く地域。宇治川右岸
河川敷とその周辺
のほか、やはり山裾
に茶園が散在する。



■ 4 民具を受入れ始めたころ

－「たまり場」としての資料館－

はじめに

本館がこれまでに収集した茶業関係民具がここでまとめて紹介される。本来ならば、もっと早い段階でこうした報告書が作成されてもよかったのかもしれないが、「お茶の京都800年」の取組が京都府を中心に積極的に行われ、おかげさまであらためてスポットが向けられる機会が訪れた。よろこばしい限りである。また、本書の刊行を後押ししたのが資料館独自に展開している出前授業、アウトリーチの活動であることも間違いない。教育現場の要請に応じて、さまざまな民具や生活道具を教室に持ち運んで、児童を相手にした本館職員による授業の実施が、必ずしも広範囲に行き届いたというわけではないようだが、先生方と若い熱心な学芸員の努力によって、ここ数年でほぼ両者の間での共通認識が根付きつつあるのはたしかである。

今日のような宇治茶業をめぐる各方面の動き、そして学校と資料館の関係、ともに開館当初とはまったく様相を異にしている。まさに隔世の感がある。そもそも民具はどうして資料館にあるのか、はじまりの頃はどんな状況だったのか。歴史資料館と名乗るにも関わらず、そのころの記録がほとんど残っていない。日々の記録をきっちりを残すといった意識は、はずかしい話だがその当時強い関心はなかったように思う。当初からの数年間、館職員にも宇治市にも資料館それ自体が初めての経験であり、実験だった。そう目立ってはいなかったつもりだが、内実は大混乱だった。その真ただ中に民具資料もあった。何ともおほほかしい昔話になってしまうが、記憶をたどり、今思えばという余談を交えながら当時の様子を思い起こしておこう。

市史編さんから資料館へ

本館の開館は昭和59年（1984）、世に資料館なるものが次々に現れる、本館のスタートはどちらかというともまだ早い部類に属するはずである。一言に資料館といっても、中身はきわめて多様である。本館は博物館的な施設というよりも、従来の部署である歴史資料室の発展的解消という意味合いの方が圧倒的に勝っていた。歴史資料室の元の名は市史編さん室、つまりここは市史の編さん事業を前身とする資料館である。

市史編さん事業は、地方公共団体が委託事業として、年次を区切って完遂させる性格のもので、規模の大小を問わず、また隣り合う市町村が競い合うようにして取り組むこともあり、高度成長の時代を過ぎた昭和40年代中ごろ以降、全国的に広がりを見せた。

編さん事業と資料館のようないわば博物館的な施設は、直線的につながるものではない。むしろ本来は異質な代物である。ただ、場合によって延長上に置かれ、配置される職員はそのままに事業の性格と内容を転換させることがある。あまり知られていないが、いや関心がもたれないというのが本当のところだが、実際はこれが相当な困難をとまなう。そこでの具体的な問題やトラブルは個別の事情が大方の発生源であることから、それぞれの施設内、公立であれば大きく範囲をとってもその行政体の内部での処理となる。事態が紛糾して、泥沼化して、それが外部に少々漏れたとしても、社会的な問題としてさほど大きく取り上げられることもない。なので、それぞれの施設でのさまざまな問題の克服、その結果をうけて活動することになる人たちの個人的な挫

折感・ストレスといった諸々の体験は、リアルタイムで現場にあった者とその周辺にとどまってしまう。

開館からともかくもの軌道に乗せる、その年月には長短があり、またその時々には経過があるし、一見安定したかに見えてその実、状況がすっかり変わっていたりすることもある。こうした不安定さと窮屈さは当事者たちには不快で煩わしいことこの上ないし、人によっては職を離れる決断をさせることもままあるのだが、考えてみればこうしたことはどこにでもありがちな普通のことである。

「歴史資料の主は古文書」という認識

そうした資料館で働く人という、本人が意識するかしないか、その程度の差は関係なく、周りからは「学芸員」と呼ばれることがあり、その主たる仕事は端目から見るとまず間違いなく「展示」つまり特別展や企画展といった展覧会となる。大小そしてさまざまな様式や形態があるが、展示室、展示スペースを必ずそこに備えているからで、学芸員は、外部からは展覧会の担当者として捉えられることになる。展覧会は特別展、企画展、そして常設展など、これまた規模も種類もスタイルもまちまちだが、これこれの展覧会はこのようであればいけない、といった決まりや制限はない。とはいえ、作りつけの固定された常設展は、たいていが開館当初にしつらえられたもので、準備室段階から展示業者との協議でその内容が固められ、といったことが比較的多いように思うが、本館にはなんとその固定の常設展がない。

「本館には常設展がありません」、そう言って怪訝な顔をされたのは二度や三度ではない。美術館などでは、常設展はその館の「顔」であるといわれることがある。それくらいのは、比較的早い時期に耳にしていたし、「博物館の基本はコレクションだろう」といったフレーズもすでに聞き覚えはあったはずだ。

本館の場合、常設展はなく、でも展示室はあって、中央にフリースペース、当初は下の写真のように移動ケースがそこに置かれて、周りの壁面は備え付けの展示ケースとなっている。もちろん収蔵庫もある。ご丁寧に、国宝・重文といった指定品が一時的でも収められることを前提として、内装を木製にした特別収蔵庫もあった。もちろん今もある。その手前の収蔵庫の約半分は二層式に、そこは棚の高さを調節できる金属製の固定の大型書架のようにになっている。開館当初、二層式の上の部分に、市役所から、その古びた倉庫からともかく持ち出ただけの「移管」文書や、市史編さん時に預らせていただいたさほど多くない地方文書などがその置き場とされたほ



開館まもない頃の展示室

かは、展示室にはもちろん、収蔵庫にもいわゆるモノは何も無かった。

行政機関のやることだから、どこでも似たようなことが起こってくる。器を作ったが、モノは何もないといったことも、さして珍しくはないような気もする。ただ、収蔵展示室というあまり聞きなれない名称の大型の木製棚をいくつも備えた一室も加えると、一回り50メートルほどある展示目的のスペースは、当然のことながら思いのほか広く感じられた。

現物の資料、モノはほとんどない。この歴史資料館における歴史資料は古文書、でもその実物はなくて、ただ情報だけはある。「ある」というのは写真である。市史編さんに先立ってあるいはそれに並行して行われる古文書調査は、その文書群すべてまたは一部を撮影して、とりあえずの第一段階が終わる。点数が多い場合は長尺のフィルムを用いる。撮影機材はもちろんそれに見合ったものがある。撮影が終わると、現像・焼き付け、出来上がりが紙焼きの写真、これこそが事実上の資料で、そこからの情報をつなぎ合わせて市史の一部の叙述が埋められていった。といっても、撮影したもののどれだけが直接的に活用されているかという、いってみればその歩留まりはきわめて低い。それはもういたしかたない。

歴史資料館で目指されたのは、宇治市史で叙述されたそうした内容を、なるべく実物で、それを間近にしてより理解を深めようというものだった。でもその実物は、ここにはないのだから、あるところから借りてこなければ仕方がない。となると頼りになるのは、近場、地元の文書所蔵者で、当然なおかつ理解のある人となる。ご協力をいただけそうなところ、もっと言えば気楽に話ができるところで、平たい話、うまく口説き落として、許しが得られれば文書（資料）をお借りして、といったことが始まった。

この手法、よく考えると、市史編さんのための資料調査の焼き直しである。どう転んでも、われわれにはこういうやり方しかできなかつたと思う。

地元の親父、おっさんたちの話を聞く

「いつぞやは宇治市史編さんでお世話になりました」といった御礼、それに「宇治市の文化センターに歴史資料館ができて、そこでこれからいろんなことを」などと続けて、そしてこちらがねらいとする展示、展覧会の中身を相手方に告げる。

世間話はそこそこに早速本題へと移りたいところがだが、そうはならない。時間がかかった。まずは相手方から宇治市への注文というか、あれはどうなった、これはどうなったという、その地ならではの課題、懸案事項についての確認、もちろん苦情や嫌味などがこれに山ほどかぶさっ



木製棚がならぶ収蔵展示室

てくる。相手の多くは地元では相当に顔の利く人がほとんどである。極端な場合、市議員であったりする。

こちらとしては「それはまったく関わりないことで」と喉元まで出ている言葉を抑えながら、なぜか「すみません、すみません」を繰り返しながら、その種の話にお付き合いすることになる。もちろん、話は行ったり来たり、横道も脇道も山道も坂道も、単なる個人的な趣味、道楽の話、家族での海外旅行にそれることも普通にあった。

いや、実はそのまだ前段として、お茶を淹れていただくのにこれもかなりの時間が費やされる。この地方ならではと行っていいかもしれない。こういうところではたいていかなり上等な玉露が振る舞われる。いま風に言えば、おもてなし、ホスピタリティーである。お茶は当主が淹れる。これもこのあたりでは当たり前。

湯冷ましに適量の湯を取り、温度を下げる。急須には予想よりもはるかに多い分量の茶葉が入られる。そうなってからも、まだ湯冷ましはしばらく定位置にある。ほとんど会話を交わすことなく、湯が急須に注ぎ込まれるまで感覚的に約数分、静かに沈黙の時間が過ぎていく。さらにそれから待つことまた数分、手持無沙汰というか、間が持たないというか、この時間帯もあまり言葉を発することなく過ぎていく。あいさつだけと思って訪ねたところほど、この時間が長く感じられる。

ようやく数碗に注ぎ分けられた茶は、お猪口大の煎茶碗にほんの数滴ずつ、すぐに飲み干すと、また二煎目の茶の抽出に取り掛かり、ほぼ同様の過程が繰り返される。湯はすでに冷ましてあるのと、一煎目よりも漬け置く時間は短縮されるので、はじめのような動作の緩慢さや間延びした印象はなく、ようやくこころあたりから本題に入るための枕的な話をすることもある。が、場合によっては茶や茶器についての蘊蓄がここから披露されることもあり、だいたい二時間前後をそのように過ごして、本来の要件はまた次の機会に、ということで引き返してきたことも少なくない。それで二度と顔を出さなかつたところも。

相手との年齢は親子ほど離れている。煎茶を淹れる私の所作、茶に関する良否の判断や基準などは、だいたいこのときに見て、味わって、感じ取ったこと、茶間屋や茶農家のおっさんたちの仕草や感覚、よく言えばニュアンス、そんなことがベースになっている。

「古文書」は難しい

一体全体何をしているのか。うまくことが運ばない日が続く。予定した展示の準備期間はどんどん短くなる。時間がない。文書は読まなくてはいけない。解説もしなければいけない。そしてそれらは最終的にはケースのなかに収まってもらわなければいけない。展示原稿の内容を吟味し、それなりに工夫をしてみるのが、そううまくいくものではない。それよりも何よりも厄介なのは、とてもテーマを充足しそうにはない史料群のなかから、少なくとも20点から30点をテーマごとに分けるなどしてそれらを整然と並べなくてはならないことだった。

さらに、業者に発注できるときはいいが、予算の関係でそれを避けるとなると、モノに付帯させる解説パネルの類は皆手書きですることになる。その時代、ワープロはまだない。経験のない、またどちらかというと苦手なレタリングのまねごとをして、原稿をその場その場で勝手に仕立てたデザインに当てはめると、コピーをとって、スチロール系の薄い板に張り付けて、またそれをカッターでまっすぐに切り、何枚ものパネルを仕上げる。これが何もかも一人での仕事である。

もちろん、それを全部そろえて、そして方眼紙に書いた設計図通りに並べて、とにかくもの作業は終わる。

文書は傾斜台に揃えて並べる。誰がいつからそのように言いだしたかは知らないが、陳列品の横に添える解説をキャプションと言い、この場合だと読み本と言って、文書を現代の字にあらためたものもその横や後に加わる。「現物」を通して、宇治の歴史に触れ、感じ、理解を深めてもらうとなると、この場合そのようになる、するはずだったが、でも、たしかにこれでは実は何もかもが辛いということが、かなり早い段階からわかってくる。

説明する側の文章は長くなる。専門用語とまではいかないまでも、固い語がそこに並ぶ。文字資料に、文字が付き添う。ケース内の壁面はどうしても手薄になる。展示は平面的となり、展示室全体は散漫な雰囲気が漂う。言ってみれば読むだけの観覧である。観る側の立場に立てば、よほど興味があれば別だが、これでは面白くもなんともない、「わからない」「難しい」といわれるのは無理もないことだった。当ては大きく外れた。といっても、すぐに何か別な手立てがうてるわけでもなかった。

企画展は自転車操業

資料館における学芸員的な仕事はこれだけではない。もともとの展示の企画、構成、交渉そして広報にいたるまで、すべて一人で行うものだし、さらに言えば、この館の場合だとその次、次の次と、計画をもち、それぞれを会期に間に合うように、準備をしていく必要があった。なぜなら、ここは常設展をもたない施設だから、展示事業を継続的に行うとすると、次から次へとテーマを変えた展示を打っていく、この手がまず考えられる。

それをここでは企画展となぜか称した。そして年に一度、秋に特別展を開催する、つまりそれ以外の平常展示は企画展と銘打つことになったのである。といっても、これもすでに記したように、開館当初は文字通りゼロからのスタートであり、モノがないわけなので、近場からそのたびに借りるとしても、おなじことばかりを繰り返すわけにもいかないが、かといって毎回毎回趣向を変えてというのも、これまた無理がある。お預かりできた旧茶師家の文書を中心にまずはともかくもお茶、そして意外性と未開拓の領域だからと東部の山間部を企画展のテーマで取り上げた。準備段階の調査で、そのまま農具をもらって帰ることもよくあった。お茶の製造や、山間の暮らしに関わるものがランダムに集められはじめる。収集計画なんてものは微塵もない。文字通り、場当たりのだった。



漁具

「宇治なら何とでもできるでしょう」なんて、まあ適当なことを言われたことを思い出すが、手の付けやすそうなテーマも枯渇していた。ただ、とりあえず何となく形にできそうなテーマ、それ自体を活用できそうなフィールドとしてあったのが巨椋池だった。開館初年度をなんとか切り抜けた翌年の昭和61年は、その巨椋池を企画展の年間テーマとして取り組むことになった。年間である。つまりその年は明けても暮れても巨椋池なわけだ。文書と絵図は相当量ある。また簡単に手元に持ってこれそうだった。年三回、三期にそれらを分けて、もちろん肝心な史料は重複させて、使い回しにして、宇治市史に載せる図版を引き伸ばせば、それでなんとか場は埋められないことはない。綱渡りだった。

「民具は集めるな」

巨椋池は昭和の初めまで京都盆地の中央部にあった遊水池である。京都市伏見区・宇治市・久御山町域にかけて広がっていた平均水深0.9メートル、周囲約16キロの水面は、昭和八年から八年間にわたって干拓と改良事業が完成した。江戸時代には「大池」とよばれたその水面で、東一口・弾正町・小倉村などの漁師が仲間を組織して活躍した。彼らと沿岸農民の利害はしばしば対立し、争論を繰り返して近代に至る。その様子の一部が資料的に裏付けられる。やり取りも経過もそれなりに面白いし、話にもなる。そう、巨椋池の展覧会に、川魚漁で用いられた漁具が加われば、ぐっと説得力が増す。展示の構成上、民具の必要性を痛感させられたが、宇治市内でかつて漁業を営んだ人はすでに皆無だった。ただ、戦後も長く、昭和50年代後半まで細々と宇治川で旧来からの手法で漁をしていた人が、久御山町におられたらしいが、もうその方も亡くなられたという情報が入ってきた。その当時よくお手伝いいただいたある人の紹介で、使われていた漁具が手に入るようになった。年間テーマを巨椋池として、その第一回目を打った直後にそれを搬入することができた。写真やイラストで見ただけのものが、まさにその実物が目の前にある。これで夏の第二回目ができる、いやおそらく今後これが定期的に本館の陳列品となることは確実だった。これが本来的な真面目な民具収集の態度と程遠いことはわかっていたが、そんなことは言っていられなかった。受入れ時に撮影したこの一枚には、本当にうれしくてシャッターを切った覚えがある。でも、周りはとても冷ややかだった。

資料館の建設にあたってもたれた委員会の席でも、このような小規模な施設で民具を集めると、集まりすぎて收拾がつかなくなる可能性が大きいので、極力抑えるようにした方がいいという意見が出されていた。先にも触れた収蔵展示室というのは、そうした意見が反映されたもので、引



収蔵展示室での漁具の展示

き受けることになった最小限のものは基本的には収蔵するだけにとどめて、必要が生じたときには、その状態のまま展覧に供するようにすべきだということから、設けられたという経緯があった。洗浄と燻蒸を終えた漁具は、当初そこにそのようにして置いて（展示して）みたのだが、大型の木製棚と古びた民具、何ともなじまない取り合わせだった。

民具資料に関しては積極的には収集しない、そんな基本的な態度それ自体がここで変わることはなかった。ただ実際には、なし崩し的にそれがすでに事実上大きく緩んでいたのも確かだった。収蔵庫には古びた農具の臭気が充満し始めていた。

茶業関係民具の位置づけ

最初に菟道地区旧大鳳寺村の農家から頂戴した一群が、今回扱われる茶業関係民具のなかではもっともまとまったものである。これらは巨椋池の漁具などよりも先行して受け入れていたのだが、どうして館蔵品となったのか、はっきりとした憶えがない。憶えがないというのは、たぶん搬入時に立ち会っていないのと、その前段の交渉や依頼といったことに私自身がそう深くかかわっていなかったためではないかと思う。旧蔵者には搬入後、展示の直前になって細かなことを尋ねにあらためて伺ったように思う。

もちろんこれも最初に紹介したときは巨椋池の漁具同様、当初は収蔵展示室で露出展示だった。その状態はやはりどうみても無理がある。でも以後、お茶を扱うとなると、ほぼ決まってその一部で、「茶づくりの民具」といったコーナーを構成するその主力メンバーとなった。近年の特別展でもその多くを活用させていただいた。

お茶の製造過程は、育成栽培、荒茶までの製茶工程、そして製品に加工する最終の工程と、大きく三つに分けていいかと思う。詳しくは本文に記されるが、本館に寄せられた製茶道具では圧倒的に第三の加工に関わるものが多く、また特徴をよく示している。荒茶が選り分けられ、製品として仕上げられていく、しかもこれらは相当に高級な商品を生み出してきた、そんな場面で活躍してきたものたちであることが想像できる。

製茶の機械化がどんどん進む中で、最終的な良品の選択は人の手によることが求められた。そのためには昔ながらの手作業に用いる道具は、出番は少ないとはいえ、篩、箕、そして撰板などは確実に保管しておく必要があったに違いない。なかでもこれらが宇治茶業を象徴するもっとも特徴的な道具たちと言えるはずである。そういった意味合いで、まとまりをもつものとして貴重な資料群とする見方が可能なように思う。



収蔵展示室での製茶道具の展示

むすびに

伊藤寿朗著『ひらけ、博物館』（岩波のブックレット・平成3年）は、博物館関係の業界では比較的有名な図書の一つとして通っている。といっても、私とその詳細を知ったのは実は最近のことである。開かれた博物館施設にというスローガンのもと、利用者の立場を正面に押し出し、博物館の教育事業に必要なのは、何か目的を持ち、活動を始めるための「たまり場」である。

とする。ここに言う「たまり場」は実は具体的には社会教育施設の代表である公民館、あるいはそこでの活発な活動を下敷きにした考え方であり、伊藤氏が言うには、自己教育力を高めようとする学習者がその利用者であり、またその施設を有効に活用する人たちだということになる。残念ながら私自身はこれまでにそうした方にお出会いすることはなかったのだが、このいかにも古めかしく映る、社会教育的なニュアンスを漂わせる「たまり場」という響きに、個人的には今あらためて強く引き寄せられている。

さまざまな形態があるものの、公民館は地域住民の自治的な活動の拠点であるとともに、主体的な学習を呼び起こす場であった。これこそが戦後、社会教育を主導した基本理念、柱だったはずだ。通常これに図書館が前後し、両施設に遅れて博物館の建設という道筋に至った中小の地方都市は少なくないはずである。かつては、これらが社会教育の三施設と称したはずなのだが、そのフレーズはもう聞かれない。ただ、本館の出発点が市史の編さんにあったこと、そしてそれがその時点で熱心に取り組まれていた社会教育事業への移行・編入として位置づけられたこと、それによる規定要因は思いのほかやはり大きかったと言わなければならない。本市の場合、公民館はヒトの、図書館はホンの、資料館はモノの「たまり場」といったとらえ方を、ここで振り返って試してみても許されるように思う。そんな「たまり場」でのモノの整理の領域が、ようやく民具の分野にまで到達をみた。活用の幅がますます広がることを期待したい。

坂本博司（さかもと・ひろし）

収蔵資料調査報告書

収蔵文書調査報告書 1	「白川金色院」と恵心院	1998年(平成10)
収蔵文書調査報告書 2	笠取地域の古文書	1999年(平成11)
収蔵文書調査報告書 3	上林三入家文書	2000年(平成12)
収蔵文書調査報告書 4	宇治上神社文書	2001年(平成13)
収蔵文書調査報告書 5	巨椋池漁師仲間文書	2002年(平成14)
収蔵文書調査報告書 6	上林春松家文書	2004年(平成16)
収蔵文書調査報告書 7	白川・藤川家文書	2005年(平成17)
収蔵資料調査報告書 8	戦争関係資料	2006年(平成18)
収蔵資料調査報告書 9	上林春松家文書 2	2007年(平成19)
収蔵資料調査報告書10	幕末の銅版画	2008年(平成20)
収蔵資料調査報告書11	宇治市の写真資料 1	2009年(平成21)
収蔵資料調査報告書12	宇治市の写真資料 2	2010年(平成22)
収蔵資料調査報告書13	宇治市の写真資料 3	2011年(平成23)
収蔵資料調査報告書14	絵ハガキ 1	2012年(平成24)
収蔵資料調査報告書15	片岡道二家文書	2013年(平成25)
収蔵資料調査報告書16	宇治市の写真資料 4	2014年(平成26)
収蔵資料調査報告書17	京都社寺境内図	2015年(平成27)
収蔵資料調査報告書18	戦争関係資料 2	2016年(平成28)

※ 7までは、『収蔵文書調査報告書』として刊行した。

収蔵資料調査報告書19
宇治茶の民具

2017年(平成29) 3月31日

編集・発行 宇治市歴史資料館

〒611-0023

宇治市折居台 1-1

TEL (0774) 39-9260

FAX (0774) 39-9261

E-mail : shiryokan@city.uji.kyoto.jp